
鈴の音

夜代衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴の音

【Zコード】

Z9657K

【作者名】

夜代衣

【あらすじ】

主人公・鈴音レナが、初音ミクのソフトを使おうとすると・・・な、なん初音ミクがパソコンから飛び出した！？レナとミクの日常物語

初音の出来事（前書き）

ボカロ系の作品についてみたかったら
ちょっとした物語です

初音の出会い

私の名前は鈴音レナ。

年齢16歳、160センチ45キロ。

高1

髪色は黒。

それをツインテールにしている。

それから

好きなことは

唄を歌うこと。

嫌いなことは

唄を歌うこと。

好きだけど、私の声が嫌い。

だって、音痴だもん・・・・・。

ピーンポーン

「はーー」

インター ホンが鳴つて、出る。

「宅配です。」「サインお願ひします」

「あ、はい」

ボールペンでスラスラ書いていく。

「はい、ありがとうございましたー」

扉を閉じると、小包を持つてコビングへ。

「お母さん、やっと来たよーーー」

「ふふ、よかつたわね。早速開けてみたら?」

「うんー」

私はカッターで封を切り、中のものを取り出す。

「やつたーーー初音ミクだーーー」

そう、初音ミクのソフトだ。

これは私が高校受験に受かったご褒美について母さんが買ってくれた。

「早速やってみよーっとーーー母さん、パソコン借りるねーーー」

「はいはい」

一階に上がつて書斎に入り、ソッパーでパソコンの電源をつける。

そして、初音ミクのソフトを入れた。

「アレ？」

急にパソコンの画面が光りだした。

「え？ 嘘？ 何？ え・・・ええええええええええええええ！ ！ ？」

余りの眩しさに、腕で目を覆う。

その時だった。

私の上に何か重たいものが乗つかつてきた。

「キヤア！ ！」

思わず尻餅をつく。

「イタタタタ・・・・な、何？」

目を開けると、私の上には緑の髪の・見慣れたあの娘^{じょ}がいた。

「アハハ・・・・マジ？」

彼女は体を起こした。

そしてバツチリ目^めが合つて・・・

「ウソー！ ！」

余りの大声に、彼女はビックリしていた。

「あの・・・大丈夫ですか？」

「喋った！！」

私、何が何だか分からない

「とにかく初めまして…私は初音ミクです」

凄く綺麗な声で、自己紹介をするミク。

「は…・・・初めまして。わ・・・私は鈴音レナ。でも、なんでミク
が・・・」

「さあ？私も良く分かりません。でも…・・・凄く暖かくて、なのに
悲しいカンジが一杯伝わってきて…・・・それで『あつた』
「ひつなつちやつた？」

「はい」

私はフウ、と一つ溜息をつく。

「ねえミク、敬語じゃなくていいよ？だって同じ16じゃない。・・・
・・16だったよね」

「あ、はい」

「敬語禁止」

「はこ・・・じゃなくて、分かった」

「よしー。」

私は二けた拍子に倒れた椅子を起こす。

「で、ミクは戻れないの？」

私はパソコンを指差して言った。

「どうやって出でてきたかもよく分かんないし……戻り方はサッパリ……」

「アハハ」マジ?」

「クリヒ! ハクは頷いた。

「…………お母さん元気?」

CD-ROMを取り出して、パソコンの電源を切る。
私はミクの手を引っ張って、下におりた。

「おかーさん」

「何? レナ? ……って、誰! ?」

私の後ろに立ったミクを見て、驚愕する。

「あの……初めて。初音ミクです
「え?」

お母さんはジーとミクを見つめる。

「 ホントだわ・・・」

お母さんには既にクリアして話してある。黙つてもかひひかはる

つとこてよがつた。

「でも、どうして?」

「簡単だぜ!」

「うーつやーつやへーー!」

「んーなるほど。分かったわ。じゃあ、しばりへ一緒に暮らすか?」

「えー?」

「いいじゃない。戻り方分からなideonでしょ? それより、賑やかになつていこじやない」

「私は別にいいけど・・・」

「私も・・・別にかまわないけど・・・」

「じゃ、決定ね!」

あ、今更になつてだけど

うちは母子家庭で父さんは居ない。

私がまだ小さい頃に離婚しちゃつたんだって。

「ああ、だしきなるわね」

「え?」

お母さん? どういへんですか? ?

そんな事を思つてこたつ、もつゞいか行つてしまつた。

「うふっと散歩でもしてこいつか?」

「うん！」

私は鍵をかけてから、家を出た。

「わあ・・・外はこんな物があるのね」

「外にはって・・・中には何があるの？」

「电脑世界にもお店はあるの」

ミクは小さく笑いながら言つた。

嗚呼・・・カワイイ！！

「あ、レナレナ！あれ何？」

ミクが私の袖を引っ張る。

「あれは学校。流音りゅうおん高等学校。私が通つてる学校」
「学校・・・」

ミクにとつては珍しいのかな？

「ちょっと行ってみよっか」

「え？」

ミクが何か言つ前に連れて行つた。強制的に。

門は開いており、簡単に入れれる。

部活をやってる人が、チラチラミクを見てくる。

「レナ、どこ行くの？」

「クラス。ちょっと忘れ物取りに

私はまず職員室へ。

「失礼します」

中を覗くと、何人か先生が居た。

「ん? 鈴音さん。どうしたの?」

この人は椎名^{しいな}カンナ先生。

私の担任で、音楽の先生。

「ちょっと忘れ物しちゃって・・・鍵、貸してください」

「ええ。いいわよ。・・・あら? その子は?」

「は、初めまして。初音ミクです」

ミクはペロリとおじぎした。

「友達です」

「そうなの。仲良くな。はい、じゃあ鍵ね

渡された鍵を持って、職員室を出た。

「ミク、あの人音楽の先生なんだよ」

「なんだ。いい先生?」

「うん。すついぐ話が弾む」

ミクと話しながら、自分の教室のある2階へ上がる。

教室の鍵を開けると、自分の机に一直線に向かつ。

「これが教室・・・」

いくつかの机に、黒板。

ミクはどうか楽しそうに教室内を見渡す。

「あつたあつた」

私は手にノートを握っている。

「それ？」

「うん。じゃ、帰ろつか」

教室の外に出たと同時に、人にぶつかった。

「キヤツー！」

持っていたノートを落とす。
つかいつタ・・・

「ちょっとおーどこ見て歩いてんのー？」

「い、ごめんなさいーーー！」

「あら？ あなた確か・・・・鈴音さん？ でしたつけ
あ、うん」

田の前に居たのは同じクラスの、まあ俗に言つ美少女だ。
名を雪村 玲奈レイナ。

「いめんね雪村さん」

「別にいいですわ」

性格は・・・悪い。

「あら? これは何かしら?」

「ちょッ!..見ないでよ!..!」

私のノートをパラパラとめぐる。

「何コレ? 楽譜? アツハハハハハ!..! 音痴のあなたがこんなモン持つてたって意味無いじゃない!..!」

玲奈はノートをポイッと捨てるが、わざわざどこかに行ってしまった。

「レナ・・・」

「大丈夫だよ」

私はミクにニッコリと笑いかける。

「気にしないで。私が音痴なのは確かだもん」「そんな事ないよ!..!」

ミクは声を張り上げた。

「レナだって綺麗に歌えるよ!..!」

ミクの声は私の何かに振動した。

「・・・ありがとう、ミク。元気が出たよ」

「レナ・・・」

私はスックと立ち上がる。

「帰るっか

家に帰つたら、既に母さんが帰つてた。

「あ、お帰り。レナ・ミク。どこ行つての?」

「ガツ」

レナは、そんなことよりも、母の傍に置いてある大きな袋が気になつた。

「お母さん・・・それ何?」

「ミクの制服

「は？」

あの、お母さん？何でいいました？

ミクの制服？

え？

「ミクも学校行つてみたら～って思つて。いいわよね、ミク
「はい！とつてもうれしいです！…！」

「つて、ちよつとまつたー…！…学校には言つたの…？」
「ええ。ゴールデンウイーク

「ええ。GWから通えるようにして」といたわ

我が家ながら、凄い行動力だ。

「とにかく、夕御飯の準備しまじょうか。レナ手伝つてね

「は～い」

ミクも手伝つてくれたから、早くできたー
つて、まだ6時なんですかー！…？

初音の学校

えへと・・・ビツモ、鈴音レナです。

只今GW明けの登校日です（早ーー）
朝からもうバタバタです。

え？ なんでかつて？

そりやあ、初音ミクの初登校日なんですから・・・・・

白と黒を基準にした制服。
流音高校の制服はなんといってもカワイイー！ ひとで有名だった。

「ミク、似合つてゐるよ
「ホント？ ありがと！」

ミクは嬉しそうにクルリと回った。

「じゃ、こいつか。早くしないと遅刻しちゃうから」

1階まで降りて、机の上にある弁当箱をカバンの中に入れる。

「じゃ、お母さん、いってきまーす」

「いってきます」

「いってらっしゃーい」

私とミクは一緒に歩いて登校。

よく見れば、道行く人が私達を見ている。

いや、ミクを・か。

「ミクー」

「なに?」

「カバン、開いてるよ?」

「あ」

手に提げていたカバンを持ち直して、歩きながら閉める。

あ、ついでにミクは手提げカバンだけど私はリュックタイプ。
元は同じじだけどちょっととした備品をつければリュックや肩掛けにな
るんだ。

まあ、とにかくにも学校到着

「ミクは先に職員室行かなきゃいけないんだっけ？」

「うん。私、レナと一緒にクラスだつたらいいな・・・」

「そうだね」

私はニッコリ笑いかける。

「じゃ、私行くね

「バイバイ！」

ミクは手を左右に振つて見送つてくれた。

class room

カラリ

教室に入つて、自分の席に着く。
と、ここで耳にした話。

「ねえ知つてる？今日転校生来るんだって！…」
「え！マジで！？どのクラス？」
「それがクラスは今日決まるんだって」
「へー。あ！それって女の子！？」
「みたいだよ」
「イヤツホー！！美人だつたらいい一のになア…！」

ああ、ミクの事か。

「私、その」「見たよ」

私はイスから立つて、みんなのト「」に行く。
つーか見たつてゆーか一緒に来た。うん。

「えー！？マジ！？！？どんな「」だつた！…？」
「すつごく美人。チヨーカワイイよ」

その瞬間、男子のボルテージがMAXになつた。

「鈴音ー！…それマジで！…？」
「うん。ついでに声も凄くキレイだつた」

「うわ～・・・クラス（の男子）がいるやくなつた・・・。

と、ソリで先生登場！――

「みんないつもわよー。わ、席に着いて」

カンナせんせー！（馬鹿）

「今日は嬉しいお知らせがあります。なんと、今日からウチのクラスに新しい仲間がきました！」

え？

あの～・・・なんておっしゃいました？

「・・・え？//クガ・・・・来るの・・・・？」

思わず口に出してしまつた。

「え？何？レナもしかして名前知ってるの？」

前に座つていた友達の水野彩音あやねに聞かれた。

「・・・あは」

言わないでおいづ・なんて思つてたのに
あ、ー！..私の馬鹿！――

「ああ、やつこえば鈴音さんもつ知つてるものね」

カンナさん？

そんな事言われたらもう苦笑いするしかないじゃーん。

「えー……ズルイよレナア……」

「だって彩音、なんか言つたら言つたでその…………アレじゃん！……」

「アレでもコレでもズルーア……」

他のみんなも騒ぎ始めた。

「せ……先生ッ……早く入つてもうらにましょウ……ウス……！」

「それもやうね。じゃ、入つてください」

私は彩音を宥めつゝ言つた。

先生、やつとこのぐだりにいけた事、感謝いたします。

「し、失礼しますッ」

ミクはちよつぴり緊張しながらも、入ってきた。

「じゃあ、早速血口紹介をお願いします」

「はこー……と、初音ミクです。これからどうつか、よろしくお願ひします」

ミクがペコッと頭を下げる、拍手と「カワイイ……」などの声が聞こえた。

「じゃあ、初音さんに質問がある人は？」

「はこー……」

真っ先に彩音が手を上げた。

「好きな食べ物はなんですか？」

「ネギです」

一瞬、クラスがシーンとなつた。
そりやそりや。ネギって……

「じゃ……じゃあ、好きな色は？」

今度はクラスの男子が。

「縁です」

「好きな歌手は？」

歌手つて……
どーすんのー? ミクー! ! !

「好きな歌手はえーと……カイトお兄ちゃんとメイちゃんとリ
ンとレン……かな?」

オールボカラロー! ! ! て、当たり前でした。

「じゃ、スリーサイン……」

ある男子が言おうとした言葉に、ミクがゼロからともなくネギを投
げつけてきた。

てか、誰もボカラロ一家にツツ ハハしないの?

「ミクー! ! ? そのネギどつから持つてきたー?」

「えーと・・・冷蔵庫？」

「イヤー。アーヒジやなくヒー・ビー」隠してたのー?・ネギー!

「カバンに折り畳んで・・・・・」

「あー、やかにギヤむこと思ひたうそれかー・・・・・」
「ハハハハ

ネギは持つてきてもいいけどせめて切つてパックかなんかに入れて
きなさい！

「あはは・・・といえず、初音さんは鈴音さんの後りね」「はーい」

え？私の後ろ？ヤツタ＝！！！

「えへへ、レナの後ろだ」

ミクのコレ に男子共危険信号発してる・・・！
絶対到れちゃう！！

「じゃ、朝のSHR始めます」
ショートホームルーム

先生からのお知らせが少し。

で、今は一時間目前の休憩時間。

「ねえねえ、初音さんってどこから来たのー？」

「アリババ奇譚」

等と女子軍団に囮まれている。

あ、質問に答えられなくてオロオロしてゐる。・・・・・。
助けてあげなきや

「もー皆…ミク困ってるよー?」

私はみんなの後ろから声をかけた。

一
レ
ナ
」

半泣き・・・あ、男子一人死んだ。

「みんな順番にね。ミクは聖徳太子じゃないんだから・・・・。シヨートしたらどうするのー?」

—そ・・・そうだね「

あ、言い忘れてたけど

私一人でも剣道とトーナメントに参加してある（笑）
え？ 部活？ 帰宅部

「イタイイタイ！！石投げないでえええええーーー！」

「いや、『メシ』。なんでもない」

彩音はメチャクチャ驚いていた。

「てか、一時間目何?」

「数学」

数学大嫌い

「？レナって数学嫌い？」

「何言つてんのミク！嫌いじゃなくて大ツツツ嫌い！！」

「どうして？おもしろいのに」

「おもしろくなああああい！！」

「こじで私、ある事に気がつきました。

ミクはボカロ。

つまり・・・・・

ボカロ

ボーカロイド

喰うつロボット（？）

ロボット（？）

（絶対頭イイじゃん！）

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

ついでに、この時点で早退した男子は5人。

初音の学校（後書き）

みつじけええええええええ――――――――――――

鎌音の決意（前書き）

とってもお久しぶりの投稿です。

いやあ、久々だー！本当にーー！

エーッ

スイマセンデシタああああああああーーー！（スライディング土下座）

鈴音の決意

大嫌いな授業が終わり、ようやく放課後だ。

「うあ～・・・疲れたよあ～・・・」

机に突っ伏した拍子に机からシャーペンが落ちた。鮮やかな緑のシャーペンがなぜか眩しい。

「レナー！帰るひよー！」

ミクが拾い上げたシャーペンをレナに渡しながら微笑んだ。
本当にかわいいなあ～～～～～！

「うん。帰るひよー！」

「つてこ～りツ！なに私忘れてんのよー～！」

親友の水野彩音みずのあやねが私の頬をつねった。

「いひや～いいひやい～～！わしゅりえでましぇんかりや～～～！」

横に引っ張られたから、イミフな言葉になっていた。

そこで私は氣きがついた。

「あれ？あやにえつぶかぢゅは？」

彩音はぱッと手を離し、答えた。

「いーのー。どうせ文化祭なんてまだ先じゃん?」

「『文化祭』?」

話を聞いていたミクが不思議そうに聞いてきた。

「そつ!文化祭!私、軽音楽部入ってるからね!」

そう、彩音は軽音楽部に入っている。

歌がとても上手いんだ。私の親友は・・・ね。
部活に入部した時から先輩達に「期待の新人だ!」って言われてた
つけ。

「彩音はね、すごく歌が上手なんだよ~。あとベース弾ける

「ギターじゃないんだ」

「ふふ~ん、ギターはレナの方が上手だよ~」

そりなんですね~。

覚えてる方は居ないと想つので今一度言いますが、私は剣道とトロ
ンドーができます。

そんでもって私は音楽「〇〇××」なので、ギターをやつしてます。

「へえ~!じゃあ、2人そろえば何でもできるね!~」

「うん。何でもできるよ」

彩音はどこか誇らしそうに言った。

(私も、そう言つてくれたら嬉しいな・・・)

カバンに必要なものだけつめる。

基本『おさげん』してるので、カバンは軽い。

(それにしても・・・だ)

今日、男子だけではなく女子も何人かが倒れた。

ミクの可愛らしさは男子だけではなく女子にも影響を及ぼした。だが、無事生き残った男女がミクに「一緒に帰りつ」くらいと言つてもおかしくないのだが。

(ただ単にそんな事ができるよつた勇者がいないだけだ)

「…………で…………よね…………」
「ほ…………ち…………だわ…………」
「…………そ…………」
「…………」

廊下から話し声が聞こえる。女子3~4人程度だらうか? 彩音もミクも、思わずそちらに目をやった。
・・・・・・・・・ひかりに近づいてきている。

軽やかな音と共にクラスのドアが開いた。

「ああら、誰かと思つたら鈴音さんに水野さんに転校生さんじゃな

い

雪村玲奈ゆきむられいな・・・・・コイツ、ホント嫌いよ。私。

「あら、雪村さん・・・。」機嫌麗しゅう、とでも言えぱいいワケ?
?側近連れてなんの?用かしらね

彩音も大分嫌つてゐる。コイツ、顔はいいくせに性格悪いからなあ。それに、学校への寄付金がハンパじやない。

だから、教師達も頭が上がらないんだ。

「側近とかあ～チョー！カソジわるいってかんじい～！～！」

おい、オマエ今「かんじ」を2回使つたぞ。意味は違う（？）けど違和感しかねえぞ。

「ほおんとお～！チョコ達がかわいいからうてえ、嫉妬はよくないお^{しつと}」

一人称「チョ」つてビーよ？明らかにきもいぞぶりっ子。

・・・・・流石に、コレにミクも引いてる。

気持ちちは分かるよ。ホント。正直玲奈以外は顔もそこまで良くない。

・・・・・ついでに体系も。

「ねえ・・・ねえ！レナ！」

「なに？」

「ミク・・・・・いま2回「ねえ」つて言つちやつたが。

（だが君ならカワイイからおkーー） 心の中で大絶叫。

「ええっと・・・クラスに居たのは分かるんだけど・・・・・え

と

「はいはあ～い！レナ・ミク、帰ろつかーー！」

もう皮肉すら言つ暇なく教室から立ち去つた。

「・・・・・なんなのよ」

「メツチャむかつくう～～～！」

「ほんとお！なんなワケ？あの態度おーーー！」

玲奈達はそこに取り残された。

ボソリと夕日の差している教室に、置いてけぼりにされた。

「なんなのよ・・・・・」

どこか悔しそうな玲奈の呟きは教室に吸い込まれていった。

「まつてよ彩音！…」

「彩音ちひけん…」

私とミクが彩音の制服を揃えとめてから息を整えた。

「ああ、『メン』『メン』。イカつこして」

彩音は本当に「なんだけど……」と色々と行動が速くなる。

特に早歩き……が、いい例だろ。

「で・・・えつと・・・」

「名前？」

「つこ」

私が尋ねれば、「クリと頷いた。

(ああああああああ……ホントにかわいいよお……)

基本馬鹿なんんで

「タカビーだったのが『雪村玲奈』。お嬢様だよ」

「お嬢様……？」

「そ。で、ギヤルが『美原月』。
月ちゃんに千代子さん……」

「いわゆる、DQNの塊かたまり」

彩音……

言つねえ（笑）

「クラスマイト・・・だよね？」

「そりだよ～。男女問わず嫌われてるけど」

背負いなおしたカバンから、ケータイを取り出して、イジる。
スライド式携帯で、色はライム。

「あんまり関わらなこぼつがいいと想つよ」

「そう・・・・・そっか・・・」

しばらくワイヤレスしながら歩いていた。彩音と分かれて、家へと
帰った。
ミクのあの表情・・・気になるな。

部屋に入つてから気づいた事があつた。

ウチは元々一人っ子で、どちらかといえば広めの部屋を貰っていた。

ロフト付きの部屋は私にとってお気に入りの部屋だ。

私は基本、その口fftの上で寝ている。
結構スペースは広く、6畳ほどある。

二
にてに

と、するとだ。以外に下はスペースが広くある。
そこにつつの間にかソファーが置かれていた。

カバンを叩きつけてしまった。

シリ芯が折れない」とを祈るといふが、なん

「この間に置いたのよおー！？つーか『前私のソファー』はー！？」

先ほど、『いつの間にかソフトが置かれていた。』としたが、実際はソフトはあった。

前々からレナの部屋にはソファーがあつた。

「ああ、騒がしいと思つたらそれね。勝手に替えたわ」「ちょっとおおお!? 何勝手にやつてんの! ?」

「それ、ミクのゲシテシゲになるから

ズサアーツとスライディング土下座。

考えても見る。

あの初音ミクと一緒に部屋で寝られるんだぞ？

「これほどこなことが今まであったか……」

「レナと一緒に部屋？えへっ嬉しいなー！」

「私も嬉しいよー！」

母は、（やれやれ）とこう顔をしながら、「まだ晩ごはんまで時間あるからね」とだけ言つて出て行つた。

と、母が出て行ってから気になつたのだが、『何故誰もミクに気づかないのだろう』ということだ。母は気がついたようだが……。

「レナ？…どうしたの？」

「うーん？…ちょっとねえ」

「？」

ロフトへヒョイッと飛び乗り、ノートパソコンを開いた。ミクも上へ上がってきた。

「どうしたの？」

スタンンドの電気を点けながら聞いてきた。

「ほり、今日も誰もミクに気がついてなかつたでしょ？」

「うん……何かおかしいの？」

「うーん。ウチのクラスでも『初音ミク』を知ってる人は何人も居るんだよ。それなのに、気づいてないから……気になつて」

立ち上げて、音楽ファイルを開く。

ここには大好きなボーカロイドの曲がタッププリと・・・。

「え？」

ない

ないないないないないない

ないないないないないないないないないないないないないない！――！

「ボーカロの曲が一曲もない！――？」

「・・・え？」

これにはミクも驚いているようだ。

画面の中にいつもならば表示される曲の数々が、今は一切無い。
他のアニソン・キャラソン・その他を開いてみるが、そちらは消えていない。

「どうして・・・？」

ボカソとしたミクの声が聞こえて、私は直ぐにファイルを閉じ、インターネットへ繋ぐ。

開いたのは『youtube』。ボーカロイド・と打ち込んで、確認する。

検索には何も引っかからなかつた。

「消える・・・」

『ボーカロイド』という存在が、世界から消えた

「アーニャ・・・・お兄ちゃんはもう一歩進んで、コト打つよ？」

レン君は？ルカさんは？」

「お・・・落ち着いて・・・！」

「グリルちゃんがベビーベストをくれるわ。・・・・・」

「ミクー！」

「みんな」

「あんなに見付かることないでしょ？」

「忘れてない！！」

ミクの肩を掴んで私の方を向かせた。

「忘れてないよ・・・・・私が忘れてないよー!」

卷之三

おゆさんた

ゆつくりと息を吸い込んだ。

『ミクだって、忘れてないでしょ？だから、』『居たのは確かだよ』

落ち着いたミクは肩から力を抜いて、レナの方を真っ直ぐ見た。

「そう・・・だね。うん、そうだね！」

ニツコリと笑ってくれた。
よかっただ。

「でも・・・なんでだろう・・・」

考察にふける。

ミクが『レジに居る』という事はきっと関係があると思つ。ミクが『三次元』にいるせいで『一次元』の初音ミクが消えた。それが少なくとも関係しているのなら、話がつく。

「ミクが…ミクが『一次元に戻る方法』を探そう?」

「え?」

「そうすればきっと…きっと監獄でくるよ。監獄の記憶の中には

「本当?」

「ホントホント…きっと大丈夫!何とかなるよ…」

一瞬…ホントに一瞬、悲しそうに見えた。

「うん、ありがと。レナ」

絶対、監のところに帰してあげる。

絶対に、監のところへ。

無限の歌の世界へ

私とミクの数ヶ月が、本格的に始まつたんだ。

鈴音の決意（後書き）

次はいつかな～

鎌倉の幼馴染（前書き）

今回もグダグダだぜい！

鈴音の幼馴染

6
月

雨がよく降る季節になつた。

今日も朝からよく雨が降っている。

そして・・・・・

「傘忘れました！！！」

ドーンと、彩音にカバンでぶたれた。

卷之三

「レナ……だから濡れてたの？」

まあ、実はですね？今AM8：30なワケですよ？

登校時間なんですよ。

(ぶっちゃけ遅刻ギリギリでした)

で、走つてきました。

傘差さず。

「それがバカだつていうのよバカア！……」「なつなにも2回も言わなくても……ツ！」

バカバカ言いつつも、タオルで頭をわしわしと拭いてくれる。彩音つてホント……

「おかーさん属性だね」

「何急にワケわからんこと書いつとんじや」

頭にチョップされました。

地味にイテH。

「あ、じゃあ帰りは一緒に傘使おうね」

「あはは・・・ありがと、ミク」

何度も言つているが、もう一回書わせろ。

(ミクかわいいよおおおおおおーーーー)

と、そんなことを考へてゐる時だつた。

「なあなあ、レナ！」

「ん? なに?」

男子の一人が話しかけてきた。

佐藤 旭^{あさひ}・・・といふ名前だ。

所詮、幼馴染である。

顔? 中の上だが上の下にはいかない位だりつ。つまり、悪くない。

「あのわ、レナッハ、初音と仲良こじやん?」

「・・・ルル、だけど?」

「だからさ、歓迎会にオマエが誘つてくれんね?」

えー?

「じつせクラス全員誘つもつだしそー場所もハハ使つし

「・・・」

「なつなんだよールの田なーーー。」

ジーーっと座って田を向ける。

「ルナ?」

「じうかした~?」

ミクと彩音も私の行動が理解不能じー。

「ああ、彩音、ちゅうと・・・・・・ルー。」

それだけで何を察したのか、彩音もミクを連れて離れていった。

「おー旭・・・ニヤツ佐藤ーーー。」

「なんだよ急にー苗字で呼んで」

「ミクがまん前に居るんだからジ・ブ・ンでーー誘えよ」

「ウフーー。」

皆様はわつとすべく説いていたと雖みが、ミクがまん前に居るので、元の会話はおかしいだろ?」

「ミクが何故か気づかなかつたのは彩音と話していたからとこつ」とで・・・

「それは知つてゐるけどな」

「とにかく、恥かしいだけだらう

「グツ」

顔を真つ赤にして若干俯いてしまつた。

知つたことやねえけどな

「自分で誘いな、シャイボーイ。やるまえから諦めてんじゃねえよ
『何キヤラだよ』

旭は『元、初音ミクを知つていた人』だ。
ぶつちやけ言えば、結構あの声に惚れこんでいた。

見た目にも

「いいかあ！－ミクがかわいいのはなあ－全員が知つてんのよ－－」

「レーレーレー、レナ！－？』

後ろでミクの声がしたが、動くわけにはいかない。

べつ別に！抱きつきたいとかそんな不埒なこと、考えてないからね
！？

「ちよつとレナ！」

「レナ様とお呼びなさい」

「イヤだし　ｗｗ」

「ならば・・・『やあ、ひざまづきなさい！－』』

「リンかあーー？・・・・・て、あ？」

旭の一言に、私もミクも驚いていた。

「リンひて・・・・・誰だっけ?ま、いつか。・・・とりあえず、な?」

「・・・・・分かつたわよ」

「・・・・・?」

急に素直になつたレナを旭は不審に思った。

カラッ

軽快な音を立てて教室のドアが開いた。

「あつやつひくんーーおつはよ」

「げつーー^{ヒトハネ}羽・・・・・」

うわあ、旭のヤツ、明らかに嫌そうな顔した。

「えー やだあー！ チヨウひて呼んで？」

「死んでも断るーー！」

「死んだらチヨウのキスでおこしてあげりゅ」

「やべえ！ 今ここ（教室は4階）から飛び降りるって言われたら飛び降りれるーー！」

とかやつてゐる時にレナは彩音とミクのところへ移動した。

「ちょ、レナ W旭君死ぬぞマジで」

いしのよ、アレは、
関わりたくないね」

女がそれいうかああああああああ！！！」

旭の声が聞こえた気がしたが、スル。

『正統』

・
・
・
・
・
・
チツ

娘なヤー二^ニ品^ヒたきやな^ナた

「アレ? ?チヨコ? 何やつてんの?」

月と書いてルナと読むやつがやつてきた。

「チツ、DQNが来やがつた」

「彩音ちゃん・・・目が笑っていないよ」

「ルナ・ガーデン」

ガンツ

「わああああああーーレナアーーー」「マヂツキツヅカ」

「たれこせバサ」

「つーか！俺はムシなワケ！？ねえ！？」「

「おやうぐわん」

「は・な・せえええええええ！」

いつの間にか来ていた先生によつて、このアホげたコントは終わつた。

鈴音の幼馴染（後書き）

最終結果

- ・レナ・保健室送り
- ・ミク・若干の現実逃避
- ・彩音・先生に怒られた
- ・旭・（色んな意味で）死亡
- ・チヨコ・玲奈によつて引き剥がされた
- ・月・スル一
- ・玲奈・ほぼ出番なし
- ・作者・眠い

雪村の瞳（前書き）

タイトルはいつも一番注目したい人物を入れるんですが、その後の『瞳』みたいなの入れるのがいつも大変です。

前回の「コタ」からやつとSHRに入れた。

「せんせー質問です」

「なんだ」

レナはスッと手を上げ、言った。

「カソナ先生をどこへやった」

「どういう意味だ」

「そういう意味だ」

「あ、レナは『椎名先生は今日居ないんですか?』って言いたいんだと思います」

彩音がフォローしてくれた。ありがたい。

「椎名先生は体調不良だそうだ。だから副担任の俺が来たんだ」

「これは珍しい。」

まだちょっとしかこの学校に居ないが、椎名先生が休んだのはこれが初めてだ。

私が学校に入学してから。

「レナ」

「ん?」

「ソックリクが話しかける。

「椎名先生って、あの音楽の・・・?」

「そりそり、音楽の・・・あ・・・」

しまった。忘れてた。

「今日は・・・今日は音楽があるのに・・・!」

それを聞いた彩音がハツとした顔をした。

「せツせんせ!…今日の音楽はどうなるんですか!?」

「俺が・・・」

『ええええええ〜』

「オイコラ! そんなに俺が嫌いかお前ら! !?」

クラス全員のブーリングに先生ちょっとびり涙目だ。
ざまあ

「だつてさ、先生見た日体育系なのに中身超文系って・・・なあ

?」

旭が隣の男子に同意を求めた。

「確かに」

「俺、てっきり体育教師だと思つてた」

「かくじょう、グレーテやる

ひとつと笑いに包まれた。

ミクがまた、話しかけてきた。

「おもしろい先生だね
・・・でしょ？」

「あの先生大好きだよ。イジりがいがあつて
「でた、ドS属性」

「前回おかーさん属性って言つてなかつたか？」

たて一列に座つてゐる私達は、クスクス笑いながら話してゐた。

「1時間目遅れんなよ～」

先生が出席簿を机において、教室を出て行つた。
さて、1時間目は・・・

「わーお、体育か
「じゃ、行こうか」
「おうー！」

私と彩音が立ち上がり、体操服と体育館シユーズを持つ。
ミクもいそいそと準備を始めた。

5月中に必要なものは揃えておいた。流石我が母。

「ほり、はやく更衣室行こー！」

彩音がドアの前でせかす。

「あー待つてよ彩音ー！」

「彩音ちゃん、早いよー！」

廊下を小走りしながら追いかける。

チクショウこの完璧女め・・・！

「彩音ちゃんって・・・足速いんだね・・・」

「50メートル7・8」

「はやつー！」

更衣室は体育館の近くにある。

「クラス」とに設けるとういう最高の学校だ。1年が終わるまで私物化できる。

これぞ、我が流音高校のいいところだ。

ロツカーは皆結構好きに使っている。
まあ、例を挙げていこうか。

まずは私、鈴音レナは・・・

(ボカラ&アニメボスター や デコリーラー があったが、ボカラのみ消失した。チクショウ)

不自然に空間がある。

隠し持っていたCDが・・・！ああ！ボカラーーー！

・・・・・ま、まあ次は彩音だ。

彩音はちょっとロツク調・・・とでもいうのかこれは？

ミラーにはかつこかわいいドクロ。
それと、音符やらなんやらかんや。

次は・・・あまり紹介したくない。マジで。

雪村玲奈のロツカーだ。

一言で言おう。

(シンプルー！)

特になんの飾りつ氣もない。

あ、でもミラーだけは妙に豪華だ。チクショウ。

次は、美原月^{ルナ}。

(言わなくてもいいよね！？いいよね！？ただのそこらへんの女子
だよコイツ！？いろんな意味で一番マシだぜコイツ！？ほら、アレ
だ！！ジャーブだらけだ！！)

あとコスメかな？まあ、いいや。

最後、琴羽千代子だが・・・

まっピンクだ。そして・・・

(旭・・・可哀想過ぎるよ・・・旭・・・)

思わず涙が込み上げてきた。

だって・・・一面旭の「写真（盗撮つぽいものも見られる）なんだも

の。

「あれは犯罪」（ボソッ）

「どうかしたのレナ？それこそ、皆行っちゃつよ。」

「なに！？」

ミクに話しかけられて気づいた。
彩音すでにいねえ。

「あと一分でチャイム鳴つちやつし・・・」

「彩音コノヤロー！置いてこきやがつてええええええー！行くよー。」

ミクー！

「あ、うんーー！」

シユーズを持つてダダダッと走つていった。

「じゃ、今日はバレーをやるわよ」

『はーい!』

「その前に準備運動ね」

体操隊形に広がり、体操を始める。

もちろん、このままでは終わらないのがこのクラスの女子だ。

「あ～・・・チヨ 「疲れたあ～」

（オイ、まだ準備運動だぜ）

「もーだるい〜メンンドイシ〜

（じやあ帰れ）

ブツクサブツクサつむせ。ぶつ飛ばすぞ。

（こじてゅ//ク・・・そのペランペラン揺れるツインテール。萌え
ます）

明らかに見る目を変えてミクを見る。

かわいいかわいいかわいい

ミクが琴羽と同じようなこと言つても許せる。多分。

（言つておく。差別じゃなー。凶別だ）

大体の事が終わったら、やっとバレーだ。

「レーナー!! クー一緒にやめつーー!」

彩音がミクの背中に抱きついた。

ミクはちょっとびっくりしたようだ。

「お〜〜・・・あ、3人で大丈夫?」

「ミクが転入してきたからどうせ1人あまるよ〜」

ならいいか。

「あ、じゃあ私、ボール持つて来るね!」

ミクは元気よく走つて取りにいった。

もう、君なら何しても許せるよ。私。

「・・・にしても、不思議・・・・・・」

「ん?」

彩音はミクの方を見ながら話しかけてきた。

「ミクとはね、初めて会つた気がしないの。不思議でしょ?」

スッと目を細めて懐かしむように言った。

彩音も、初音ミクを知っている人だ。

人だった。

「不思議・・・じゃないよ・・・」

「え?」

私も、少し目を細めていった。

懐かしむ・・・じゃなくて、嬉しくて。

やつぱりミクが居たといつ痕跡が沢山ある。
それが分かるだけで嬉しくなる。

「あいつ、どこかで会ってるんだよ。覚えてないだけで」

「そうかなあ・・・」

「絶対そう!」

「口うと笑う。

(全く、レナのやつに「好きだよ。私)

彩音がそう思っているとはもちろん知らず。
ミクがボールを持って走ってきた。

「遅くなつて、ごめんね」
「いいよ~。じゃあ、やろつかーー!」

3角形に広がつて、練習を始めた。

「ちよっと、レイナー！？」
「うん、ごめん。ちよっと気分悪いのよ」

「なら・・・別にいいけどお・・・」

玲奈は遠くから3人の様子を見ていた。

今、玲奈の相手をしているのはルナなのだが、ルナには田を向けず、3人に目を向けていた。

(何で、こんなにムシャクシャすんのよ・・・ムカつくわ)

玲奈は体育館を出て、外にある水道まで来た。
蛇口を上に向けて、水を出す。
幾分か口に含み、飲み干した。

薬みたいな味がする。

「アイツら・・・見てなさい・・・」

田に暗い憎悪を灯しながら、体育館に戻つていった。

雪村の瞳（後書き）

まあ、頑張つて考えます。

今回、無駄にテンション高こままで行きます。
ほんと、テンション高すぎでおかしくなつてます。
びりじょつ

体育が終わってから、雪村玲奈は早退したらしく。

「わっつまああー！ktkrー！フォーーーー！」

・・・などと、声に出しつしまつと流れにアレなので、心中で大絶叫しておこた。

水野彩音が。

「やつたあー！一人消えたぜザマー＝ローーー！」

「彩音～～、アンタの心の大絶叫がここまで聞こえてきたよ」

「じめん」

「許す」

只今昼休憩。

2・3・・・・と、嫌いな教科（数学・英語）ときて、4時間目は好きでも嫌いでもない国語だつた。

特に書くこともないので省略する。
描くことは多々あつたけどね（笑）

まあ、その間玲奈が帰つてこないので、側近が様子を見に行つたら、
早退したことだ。
んでもつて、冒頭になる。

「彩音ちゃん、あんまりそういうことを聞くの、よくないよ？」

「うん。アタシも絶対悪口言こませるーー。」「感化されるの早シーー。」

思わず、弁当を食べる手を止めてしまつたぢやないか。

「あらア、何を仰つて いるの レナさん。 私、 暴言とか 暴力とか 嫌い ですの 」

二二

「つて、喰らつと思つたか！馬鹿めー！」

「そんなことが…………！？」私の剣（箸箱）を箸で受け止めただと…………！？」

…私も強くなっています」と喜んでいた…」

箸箱と箸で鍔迫り合いの対決になつてしまつたが、そんな中でも「はまつこ」。

「クスクス・・・早く食べて音楽室行くんでしょ?」「ううだつた」「

ミクに言われるまで忘れてた。次、音楽じゃないか！

「ムツチー（副担任：室伏 淳）つてゆーのが残念だけどね」「いいじゃない。ムツチーおもしろいし」

「ああ、副担任のアダナ。旭命名」

旭とは、幼馴染の佐藤旭のことだ。

その旭は、といふと・・・

・・・まあ、昼休憩の憩いの時間に「んな」と報告してもいいのか分からぬが・・・

チラリ、と旭の方を見た。

「あらへるへん」

相変わらず、
琴羽に追いかけられて いるようだ。

「わあ・・・佐藤君、大変だねえ・・・・・毎日?」

彩音の言つゝことにして、激しく同意する。

・・・とりあえず、おもしろいので2人の攻防を見ながら昼飯をガ
ンガン進めていく。

「もううーーーなんで逃げるのぉーー？」

「自分の胸に問い合わせてみろー！」

「あやー ムネと・か▽▽旭君のえつちい!」

意吟かせかみああああハハハハハ

「テメエが追いかけてくるからだろーがア！！」

なんか、『銀魂』のノリになってきた。
あの、ダラダラと分が無駄に長く続くヤツ。
小説読んだ気になるよね(笑)

パシャツパシャツ

「……？ テメエ、何撮つてんだア……」

琴羽が持つていたカメラをぶつ壊そうと（口口大事）、もの凄い勢いでターンした。

のが、まずかつた。

「旭くうん！ やつとチョコの方にきてくれあ~~~~~嬉しいにや
「つとお危ねエ……」

琴羽の前でギュッとストップをかけて、止まった。

そして、まるで2次元のキャラクターの「」とく、琴羽との距離をとつた。

「クツ……！ あのカメラは取り返してえ……！ だが、危険が大きすぎる……！」

「もう、そんな、テレなくてもいいのにい~~~
「いつぺん眼科行つてこい！！」

「えツ・・・・」（ぼつ）

「なんで照れてんだあああああああ……」

ビハシよハ。

見ていて飽きない

オモロイオモロイ　ｗｗ

ガチでおもろすぐるビハシよハ　ｗｗｗ

「レナ、顔に全部出てるわよ」

「すつ・・・・・スマソ・・・私には・・・耐えられん・・・

卷之二

「笑つてんじやねーよ！－レナ－の野郎！－」

もちろん、華麗にスルースキル発動にござります。

「レナ！彩音ちゃん！そろそろ行く？私は準備終わつたよ！」

卷之三

いいのよ~ミク~。コイツぶつ

卷之三

「えつ・・・！？ちよ、待て待て待て！！置いてかないでえええ

「この野子（のやこ）で漁（う）さでねえ。アーリー

二三

4

旭を置いて教室を出て行つた。

～視点チャーンジ S a t o _ A s a h i

「急にローマ字表記しても意味がねえ wじゃないわーー！」

「旭君 w チョコ の あ、騎士様になつてくれりゅう？？」

「テメエのナイトになるんだつたらゴキブリのナイトにでもなつて
やるーー！」

「え、じゃあ、私のナイトになつてくれるのーーうれしいこやあ
どんなカン違いだああああああああーーー！」

あまりにうつとうつしいので、ついつい椅子を投げてしまった。
イヤ、ホント衝動的。

「きやああー！」
「ヤバッ！！」

流石にマズイと思ったので、もう一つ椅子を投げて阻止した。
琴羽には当たらなかつた。

・・・水野の机には当たつたケド。

(ヤベエ、バレたら殺される・・・ハツー！)

近くにいた友達を見れば、めっちゃ笑ってる。
しまった・・・」「イツの属性は・・・・・・・・！――・

「あつちやんに報告しとくねえ～～
やめてええええ――！」

あつちやんとは、水野のあだ名だ。

今笑ってるこいつは日野彰。親友なんだけども、結構な腹黒だ。
別に、いつもじゃないんだけども、好奇心旺盛といつか何といつか・
・・。

まあ、とりあえず、彰と水野は腹黒仲間で。
時々『他人が入ってはいけないような真っ黒トーク』を炸裂してい
る。

「頼む彰！――ジユース奢るから――！」
「ん～・・・？」
「・・・ジユース+グミ――！」
「んんん～～～？」
「・・・分かつたよ！ジユース+グミ+ジャンパビツだーー！」
「グミマイナスしてオッケー」
「よつしゃああ――！」

なんとか難は逃れたようだ。

だが、俺は大切なことを忘れてたんだ。

(なんか熱い視線が・・・！)

おれるおれる振り返ると、髪を振り乱したモンスターが・・・

「旭君、私の事守ってくれたんだ・・・！」

「ゲツ！ しまつた！！」

そのセリフ、初音に言つて欲しかつたなあ・・・

とか、考へてる暇ねえ！－

「あ～さひくうううううううん！－！」

「たつ・・・助けて彰ア！－！つて、いねえ！－！」

「あー、彰だつたら先行つたぜ？」

「死ね！絶対奢つてやらん死ね！－！」

・・・イヤ、やつぱ奢ろづ。コイツよりも水野が恐い。

「つーわけで助けて悠人おおおおおおおー！－！」

「いっちはんなあああああああー！－！」

俺は近くにいた神崎かんざき 悠人ゆうじんに助けを求めた。

コツチは幼馴染。レナと一緒によくつるんでいた。

「やん！ナイトが2人イ！－！」

・・・すっかり自分のことで忘れていたが、悠人も琴羽に追わされて
いる。

「『めん！』

「許さん！」

「許して！」

「イヤだ！」

あああああーー！」つなりや最終手段！－！

俺は教室の後ろにあるロッカーカーから、音楽の道具を取り出すと、悠人と共に教室を飛び出した。

「ああーー！筆箱忘れたーー！」

「戻る気か悠人ーー！」

「貸せーー！」

「モチロンですッーー！」

遠くから琴羽の声が聞こえてくるが、振り返る気は一切無い。そのまま音楽室まで全力疾走をしていった。

佐藤の苦心（後書き）

新キャラクター 2名登場です。

旭の友達をスッカリ忘れるところでした（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9657k/>

鈴の音

2011年11月29日13時46分発行